

6 . 現代日本のキリスト教文学

- 遠藤周作と三浦綾子 -

1 . 現代日本の代表的なキリスト教作家

近代日本文学に大きな影響を与えたキリスト教・聖書は、現代の大衆文化の時代に、本格的なキリスト教作家を生み出すことになった。

2 . 遠藤周作(1923-1996)

日本人とキリスト教という問題：「日本人の感覚は基督教をうけ入れない何ものかがある」。近代の多くの作家がキリスト教に入信しながら、やがて多くは去っていった。

「自分の中にひそんでいる、日本人としての反基督教的な感覚に気づかずに洗礼を受けたため」ではないか。

キリスト教を日本的な視点で読む

父なる神に対する母なるもの（哀しい眼差し、無限の愛の赦し『母なるもの』1971）
弱い神

3 . 『沈黙』（1966）

カトリック教史の汚点として沈黙させられてきたものを、沈黙の底から呼び起こすこと。名も無き者の痛みに神は沈黙されなかった。誰がこの弱者を神の名によって裁きうるか。キリスト教団の潜むリゴリズム、律法主義への批判。

「その踏絵に私も足をかけた。あの時、この足は凹んだあの人の顔の上にあった。……その顔は今、踏絵の木の中かで摩滅し凹み、哀しそうな眼をしてこちらを向いている。（踏むがいい）と哀しそうな眼差しは私に言った。（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう十分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから）「主よ。あなたがいつも沈黙していられるのを恨んでいました」「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」……「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できよう」司祭は戸口にむかって口早に言った。」（新潮文庫、pp.293-294）

「2:6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、7 かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」
（フィリピの信徒への手紙）

「インマヌエル」

4 . 『死海のほとり』（1973）

「一人の跛の男がじっと待ちかまえていて、イエスのそばに近寄り、杖で体を支えながら泣くように叫んだ。「わしはこんな体だ。長い間、足が萎えている。働くこともできぬ」たちどまって自分を見つめるイエスに、跛はたのんだ。「治してくれ。憐れんでくれ」... イエスは黙っていた。頬がこけ眼のおちくぼんだその顔に、絶望の色がはっきり浮かんだのがアンドレアにもよくわかる。.....跛の訴えはアンドレア自身の訴えでもあり、畠に立った哀れな女たちの訴えでもあったのだ。「あなたには.....その力がないのか」イエスは杖をひろい、地面に萎えた足を投げ出して倒れている男の体を支えようとした。それから彼は、自分をじっと見つめるアンドレアや女たちに溜息と共に答えた。「わたしができることは.....あなたたちと苦しむことだから.....。あなたたちの苦しみをわたしは.....」そして彼の言葉は跛の泣き声にかき消された」(新潮文庫、pp.42-43)

「イエスはただ、くぼんだ眼で悲しそうにみなを見つめるだけだったが、たまりかねた弟子の一人が両手をひろげて答えた。「この人が.....あなたたちに何をしたというのだ」「何もできなかった」と誰かが言った。「何もできなかった」「だがこの人は、あなたたちを愛そうとした。あなたたちと一緒に苦しもうとしただけだ」」(p.50)

4 . 三浦綾子 (1922-1999)

『氷点』(1965)、「氷点を書き終えて」と題する文章の中で、「私はこの作品で原罪を訴えたかった。登場人物のひとりひとりにそれはあるのであるが、端的に現わすために少女陽子に問題のスポットをあてた。何の汚れもない、善意の塊のような少女にそれを気かせようとした」と語っている。陽子は殺人犯の娘であることに悲観して自殺したのではなく、「原罪」「自分の中にある罪の可能性」を自覚したがゆえに死を選んだ。

5 . 『積木の箱』(1967)

大人たちの中で歪んでゆく少年。佐々木豪一の妻妾同居、一郎(中学三年生)は父の現場を目撃。一郎の虚無感、一郎の異母兄弟で、天使のようにあどけない川上和夫。一郎の虚無と向き合う杉浦悠二と反抗する一郎。杉浦が宿直の時、一郎は学校に放火する。その責任をとって学校を去る杉浦と出火の時宿直室にいて大やけどを負う和夫。名乗り出る勇気もなく、放火を認めない一郎。しかし、

「「おにいちゃん」久しぶりに一郎に会った喜びに、息を切らせながら和夫は一郎を見上げた。右手に白いホウタイが、一郎の目を強く射た。「おにいちゃん、どうしたの。どうして遊びに来てくれなかったの？」一郎は口を歪めた。「おにいちゃん、ぼくね、やけどしちゃったんだよ。ぼくの指が全部くっついちゃったの」和夫は無邪気に、右手をのべた」(新潮文庫 下 p.319)

「一郎の涙に和夫は驚いて、三度その手を一郎の肩においた。「おにいちゃん、泣いちゃだめだよ。笑ってよ」「おれだ！ おれが火をつけたんだよ！」一郎は何かにつかれたように、大声で叫びながら走り出した」(p.321)

豪一の罪を批判していたにもかかわらず、同じように罪を犯してしまう一郎、そして同じ豪一の子供である和夫によって、罪の告白へ導かれる一郎。原罪の中に生きる人間とそ

の救いの可能性。

<まとめ>

1．日本文化をキリスト教という視点から見る

日本文化の特殊性と普遍性

日本文化の母のイメージ、罪の自覚の深まり

2．宗教にとっての文学の意義

宗教的真理あるいは宗教的問いに形、表現を与える